The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	洛汭奚囊 ： 中井履軒の京都行
Author(s)	湯城, 吉信
Citation	懐徳堂センター報. 2004, 2004, p. 49-76
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24351
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『懐徳堂センター報』二〇〇四（大阪大学大学院文学研究科・文学部懐徳堂センター　二〇〇四年二月二九日発行）

『洛汭奚囊』――中井履軒の京都行

湯城吉信

はじめに

中井履軒は幽人（世捨て人）と称し自適の生活を送り、後世に厖大な著作を残した。兄竹山とは違い直接懐徳堂の校務に携わることもなく、また仕官の招聘にも応じることがなかったという。[注一] その履軒が一度だけ宮仕えをしたことがある。明和三年（一七六六）、三十五歳の時から一年間の京都滞在がそれである。

履軒は公家の高辻世長の補佐役として京都に招かれた。高辻世長（後胤長と改名）は、菅原道真の末裔で、代々文章博士を司る家系であった。履軒が招かれたのは、中井家と縁のある京都の革嶋家が高辻家に仕えていた関係によると考えられる。[注二]

だが、すでに幽人としての生き方を宣言していた履軒[注三]が、どうして京都へ行ったのだろうか。また京都ではどのような一年を過ごしたのだろうか。『懐徳堂考』『中井竹山・中井履軒』など従来の研究からは、この二つの問いに対する十分な答えを見つけ出すことはできない。

一つ目の疑問「どうして京都へ行ったのか」については、私は一言で言えば、履軒がまだ不惑の年に達していなかったからだと考える。その根拠は、『履軒古風』巻一に見える、京都行に先立つ詩にある。その紹介は稿を改めたい。本稿では、二つ目の疑問「京都での一年はどのようだったのか」を探る資料として、履軒著『洛汭奚囊』の内容を紹介したい。

『洛汭奚囊』の洛汭とは京都の中の意で、奚囊とは詩文を入れる袋の意である。京都行の出発から帰阪までの詩を製作順に並べている。詩であるため、履軒の客観的状況を説明する材料には乏しいが、履軒の心情は如実に表れている。本稿では、百聞は一見に如かずとの諺に基づき、論じるよりも作品をそのまま紹介する形態を取る。ただし、私に解読できない箇所は疑問符（?）をつけている。博雅の士の御教示を仰ぐ。

テキストは、懐徳堂文庫所蔵の履軒手稿本を底本とし、適宜他本を参照した。履軒の詩集『履軒古風』巻二にほぼそのまま収録されているので、それも参照した。

注

（一）西村時彦『懐徳堂考』下八四頁。

（二）加地伸行編『中井竹山・中井履軒』一九四頁。

（三）履軒が幽人と称し、自適の生活を目指したのは、京都行に先立つ。『懐徳堂考』『中井竹山・中井履軒』一八六頁を参照のこと。

一、丙戌仲冬、将北入京、飲別諸友（丙戌仲冬、将に北のかた京に入らんとし、諸友と飲別す）

＊丙戌は、明和三年（一七六六）。送別会での作。参加者の詩は『懐徳堂会餞詩巻』にまとめられている。別れを惜しみながらも、履軒の出世を祝う詩が多い。拙稿「『懐徳堂会餞詩巻』訳注―中井履軒京都行の送別詩」（『中国研究集刊』陽（三四）号、大阪大学中国学会、二〇〇三年）を参照。

此別非遠別　　此の別れ 遠き別れに非ざるに
何事意惆々　　何事か 意 惆々
雪裏若相思　　雪の裏に若し相思わば
長江一夜棹　　長江に一夜棹ささん

（注）＊雪裏若相思……王子猷が戴安道に会いたいと思い、雪の夜に船を出し彼の家の前まで来たが、興が尽きたので会わずに帰ったという故事が『世説新語』「任誕篇」に見える。履軒の和文書『華胥囈語』所収の「独ふね」（京都革嶋家への訪問を題材にした紀行）の中でも「みやこ（都）のかたのゆかしきおりおりは雪にも花にも剡溪の棹＊をわたくしもの（私物）にしたる」との文句が見える（剡溪は戴安道が住んでいた場所）。転句、結句はこの故事を前提として作られたものであろう。

（訳）遠くに行くわけではないのに、どうしてこんなにつらいのか。でも、もし会いたくなったら一晩舟を漕げばいいだけのこと。

二、離席、奉答伯兄（席を離れ、奉みて伯兄に答う）

＊離席は送別会のこと（『昔の旅』に同様の用例あり）。

世事可長歎　　世事 長歎すべし
臨別心緒乱　　別れに臨んで 心緒 乱る
分離能幾歳　　分離 能く 幾歳
豊城一双剣　　豊城一双の剣

（訳）世の中つらいものです。別れに臨んで心が乱れます。どれだけ離れ離れでいられるでしょう。我々はあの豊城の一対の剣なのに。

（注）＊豊城一双剣……『晋書』「張華伝」に、「太阿」「龍泉」の二つの名剣がいっしょに埋まり、光を放っていたとある。この剣は張華が偉くなってから帯びるべき剣。自分たちが名臣に仕えるべきことを示唆するか。

＊「豊城一双の剣」の喩えは、不可分を表すのだろうが、名剣に喩えるのは当然自負もあろう。西村時彦の「互に文運を興さんとの誓いもやありけん」（『懐徳堂考』下六二頁）という文句はここによるか。

三、既上舟、奉寄伯兄（既に舟に上り、奉みて伯兄に寄す）（三首）

＊京都に行く途中の作。当時、大阪から京都へは舟で淀川を遡ることが多かった。自嘲しつつも期待を秘めているようだ（山中浩之も同感。『中

井竹山・中井履軒』一九四頁)。

行李書半船　行李 書 船に半ばす
乗月遡澱水　月に乗じて 澱水を 遡る
自笑閉戸生　自ら笑う 閉戸生
多事従茲始　多事 茲より始まらんと

(注)＊行李書半船……『履軒小乗』という雑記帳にこの京都行の荷物が記されており、おびただしい数の書物と器物を持参したことがわかる。

(訳)荷物は書物が船半艘、月夜の中、淀川を上ります。ああ、世間知らずの書物の虫の厄介事はこれから始まるのだな、と自嘲します。

(参考)竹山『奠陰集(詩集)』巻三「答弟処叔之京却寄三首」では「来詩曰、自笑閉戸生、多事従茲始」に対し、「平安山水富、卜築慨幽情、祇恐花開日、依然閉戸生」(花が咲いても書物の虫では困るぞ)と返している。

其二

遺業分一経　遺業 一経を分かち
浮遊向京洛　浮遊し 京洛に向かう
休憂阿徳貧　憂うるなかれ 阿徳は貧しく
自無塵縄縛　自ら 塵の縄縛するなし

(訳)(これまでいっしょに継承してきた)父祖の業を分かち、私はふらふらと京都へと向かいます。でも心配しないで下さい。貧乏人の私は、世俗の塵に縛られることはありませんから。

＊私は俗世に縛られることはありませんとは、出世などせずに帰ってきますということか。

(参考)竹山『奠陰集(詩集)』巻三「弟処叔之京却寄三首」では「来詩曰、休愁阿徳貧、貧時即是福」とある(異同注意)。それに対し竹山は「雖作朱門客、敝袍無顔色、自後京師信、飽聞好消息」(相変わらずだな、いい知らせを待っているよ)と返している。

其三

生来一双身　生来 一双の身
今始辞広被　今 始めて広被を辞す
縦有濁醪酌　縦い濁醪の酌む有れども
恐不敵雪威　恐らくは雪威に敵わず

(訳)これまでずっといっしょだったのに、今私は初めてあなたの温かい庇護の下を去ります。たとえ濁り酒を飲んでも、向こうの寒さ(＊心の寒さもあるだろう)を凌ぐことはできないでしょう。

(参考)竹山『奠陰集(詩集)』巻三「答弟処叔之京却寄三首」では「来詩曰、生来一双身、広被今始辞」とある。それに対し竹山は「同室如讐敵、悠々天下是、分異無多憾、乾坤一広被」(渡る世間に鬼はなし)と返している。

四、至京、奉寄伯兄
(京に至り、奉みて伯兄に寄す)(二首)

形影今分離　形影 今 分離し
両地長凄酸　両地にて 長く凄酸す

夜々各挑灯　夜々 各々 灯を挑(かか)げ
応照往来魂　応に往来の魂を照らすべし

(訳)(一心同体であった)形と影とが今別れ、二つの地で嘆き合う。夜毎にお互い灯りを掻くと、魂を映し出すことができるでしょう。

其二

夜々魂飛去　夜々 魂は飛び去り
在君残灯辺　君が残灯の辺りに在り
請看睡覚時　看るを請う 睡覚する時
君影是我身　君が影は 是れ我が身なるを

(訳)夜毎に魂は飛び、あなたの燃え残る灯の辺りに行きます。お休みになる時にどうぞご覧になって下さい。あなたの影は私自身なのですよ。

(参考)竹山『奠陰集(詩集)』巻三「予喪女布美日適得処叔憶予詩攬涙和之二首」とし、上記二首に対し「爾写還郷夢、字字極悲酸、豈知屋梁外、別有不帰魂」(悲惨なのはお前だけではない)「女死猶在褥、挙室啼枕辺、新詩床下落、擬為阿弟身」(お前も思ってくれているのか)と返している。布美は十一月二十七日に一歳にならずしてなくなった(以下「覩家書有感」詩参照)。

五、雪朝奉呈菅公(雪の朝、奉(つつし)みて菅公に呈す)

＊菅公は高辻胤長(たねなが)卿のこと。菅原道真の末裔なのでこのように言う。

宵聴白雪調　宵に 白雪の調べを聴き
魂遊瑶台辺　魂は瑶台の辺りに遊ぶ
暁来推窓戸　暁来 窓の戸を推せば
宛然夢中看　宛然として夢中に看しごとし
公有白雪什。昨夜朗誦使積徳聴焉。
(公に白雪の什有り。昨夜 朗誦し、積徳をして焉(これ)を聴かしむ。)

(訳)宵に白雪の調べを朗誦していただき、魂は玉の台(雪の積もった台)に飛遊しました。朝になって窓を開けてみるとあたかも夢の中でのような景色が広がっていました。

六、覩家書有感(家書を覩(み)て感有り)

＊十一月二十七日以降の作。(注)参照。

孤身在他郷　孤身 他郷に在り
家書慵発緘　家書 緘を発(ひら)くに慵(ものう)し
小姪聞夭折　小姪(しょうてつ) 夭折するを聞く
恐有哀愬言　恐らくは哀愬(あいさく)の言有らん

(注)＊小姪聞夭折……竹山の娘布美は十一月二十七日に一歳にならずしてなくなった(『中井竹山・中井履軒』二八五頁)。前掲「至京、奉寄伯兄」詩(参考)を参照。

(訳)独り異郷にあり、家書を開くのもめんどうくさい。幼い姪が亡くなったと聞いたが、その嘆きが述べられているだろうから。

＊履軒の心も閉じているか。「それでなくても私はつらいのに」という気持ちか。

七、聞槐庵兄落新居、有此寄
（槐庵兄の新居を落するを聞き、此の寄有り）

＊明和四年（一七六七）春の作。槐庵は古林相如、字正民、槐庵はその号。『懐徳堂会餞詩巻』に見える。竹山『奠陰集（文集）』巻九に壙誌がある。

輪奐開盛宴　輪奐として盛宴を開き
春生酔舞中　春は生ず　酔舞の中
孰知孤館雨　孰か知らん　孤館の雨に
裂裳窒壁孔　裳を裂きて壁の孔を窒ぐを

（注）＊輪奐……建物の壮大美麗な様。

（訳）盛大に宴を開き、酔い舞う中に春は生じる。（一方）誰が知ろう、独り暮らしの私が、端切れを裂いて雨漏りを防いでいるのを。

＊転句結句は大げさで、新居祝いに不吉過ぎる。ただ、それぐらい滅入っていたということだろう。

八、永輔義佐寄酒鶏子来、題簡背謝之（永輔・義佐　酒と鶏子とを寄せ来たり、簡背に題して之を謝す）

＊永輔とは早野仰斎（名辨之、字士誉）。履軒より十四歳年少だが履軒と親しかったらしく、この詩以外に「述客中況、答早士誉」「憶旧遊寄早士誉」「答早士誉」（三首）にその名が見える。義佐とは原氏（校勘参照）。簡背とは書翰の裏。

破愁莫若酒　愁いを破るは　酒に若くは莫し
飲酒須肴美　酒を飲むは　須く肴　美かるべし
故人並相贈　故人　並びに相い贈る
深知加餐意　深く知る　加餐の意を

（校勘）『履軒古風』では「永輔義佐」を「早原」に作る。

（注）＊加餐……栄養を取り、養生すること。また、人の健康を祝す書翰語。

（訳）愁いを解くには酒が一番。酒を飲むには肴が大事。その両方を贈ってくれた友に、私を思ってくれる情の深さを知った。

九、述客中況、答早士誉
（客中の況を述べ、早士誉に答う）

＊早士誉は早野仰斎（名辨之、字士誉）。「永輔義佐寄酒鶏子来、題簡背謝之」詩参照。

隠淪不択地　隠淪　地を択ばず
孰知方朔賢　孰か知らん　方朔の賢を。
五斗無折腰　五斗に腰を折る無きも
未裁帰去篇　未だ帰去の篇を裁せず。
囂々耽吟哦　囂々として吟哦に耽り
飽看雪裏山　雪の裏の山を飽くまで看る。
依然旧阿蒙　依然として旧の阿蒙
髯毛又一年　髯毛　又　一年。

(注)＊方朔……東方朔。漢の武帝の時代の人。後世、朝隠(朝廷に仕えながら隠者の心を守る人)として有名。『文選』に「答客難」(巻四五)と「非有先生論」(巻五一)とがある。「答客難」はうだつが上がらないことを人に咎められ、それに答える形式の文章。東方朔は、時代が悪いからだと言い訳しつつ、それでも我が身を修めるべきだと説く。「非有先生論」では、才能がありながら発揮しないのは不忠だと咎められた非有先生(架空)が、今は諂う者が昇進する世の中だと批判する。履軒は自分の境遇、生き方を東方朔と重ね合わせたのであろう。『文選』には他に、夏侯湛作の「東方朔画賛」がある(巻四七)。東方朔がその才能を十分発揮できず不遇をかこちながらも、世俗に対して一定の距離を保ち、よく自己を持したことを称える。「朝隠」の語が見える。

＊五斗無折腰……陶淵明は、五斗の米のためにぺこぺこしない(宮仕えしない)と言って、「帰去来の辞」を書いて故郷に帰り、隠遁生活を送った。「陶淵明伝」に「淵明歎曰、我豈能為五斗米折腰向郷里小児。即日解綬去職、賦帰去来」とある。履軒が陶淵明に傾倒していたことは『履軒古風』序に述べられている(「酷愛彭沢之辞」＊彭沢とは陶淵明のこと)。『履軒小乗』の京都への携帯した本のリストにも『彭沢集』が見える。

(訳)隠遁するには場所は関係ない。誰が朝廷に仕えながら隠者の心を持った東方朔の賢を知ろう。五斗の米のために腰を曲げないが、まだ陶淵明のように『帰去来の辞』は著していない(隠遁はしていない)。ひたすら詩を吟じ、見飽きるほど雪の山を見る。私は相変わらず、ただ鬢が一年分伸びただけ。

＊心は隠逸。私は無為に一年を過ごしてしまったと言う。「飽看雪裏山」は「南帰途中口号」其二に「胸襟飽烟霞」の表現があるのを参照。

一〇、羈鳥辞、上菅公(羈鳥の辞、菅公に上る)

＊羈鳥は陶淵明「帰園田居(其一)」に「羈鳥恋旧林」の句あり。

有鳥有鳥　鳥有り　鳥有り
雝々其音　雝々たり　其の音
紛群飛而棲止兮　紛として群飛し棲止し
于海之湄　海の湄にあり
朝飲朝陽之清露兮　朝に朝陽の清露を飲み
暮啄汐水之琅玕　暮に汐水の琅玕を啄む
毛羽皓其修潔兮　毛羽は皓として其れ修潔たり
浴乎月中之醴泉　月中の醴泉を浴びる

(注)＊雝々……雍に同じ。和らぐこと。

(訳)鳥あり、鳥あり、その声は和やか。紛然と群れ飛び、海辺に憩う。朝には朝露を飲み、夕べには夕べの露を含む。羽は真白く清潔で、月の甘露を浴びる。

世不与我周兮　世　我と周わず
時繽紛其嘉鴆　時　繽紛として　其れ鴆を嘉みす
悲素秋之将尽兮　素秋の将に尽きんとするを悲しみ
兼葭黄而其零　兼葭　黄ばみ　其れ零む
景翳々其西傾兮　景　翳々として　其れ西に傾き
気凛々以凄然　気　凛々として　以て凄然たり
海風忽飄兮揚濤　海風　忽ち飄り　濤を揚げ
猶駭飛兮失乎群　猶い駭き飛びて　群を失う

(注)＊世不与我周……「離騒」に「雖不周於今之人兮」という文句がある。＊時繽紛其嘉鳩……「離騒」に「時繽紛其変易兮」という文句がある。＊鳩……毒鳥。「離騒」にも見える。

(訳)世は私と合わず、時流は乱れて悪者を嘉みする、秋の暮れんとするを悲しみ、葦は色褪せ凋む。影は黒々と西に傾き、気は張りつめ寒々しい。海風が急に起こり波を立て、慌てふためき、群れを失う。

冲碧雲而追紫電兮　碧雲に冲りて紫電を追い
汩蕩々以冉々　汩蕩々として 以て冉々とす
蔽長江以北征兮　長江を蔽いて 以て北征し
歴交野与鳩岑　交野と鳩岑とを歴る　＊鳩岑は九岑か。
瞻下土而回翔兮　下土を瞻て 回翔すれば
維荊棘之駹雑　維れ荊棘の駹雑たりて
其胡可止　其れ胡ぞ止まるべき

(注)＊汩蕩々、冉々……ともに行く様。

(訳)雲にぶつかり、雷を追い、行きまた行く。長江を下に北征し、交野と鳩岑とを過ぎる。地上を見て旋回すると、いばらが生い茂り、留まることができない。

乃奮翮而増逝　乃ち翮を奮いて増逝し
望叡嶽兮下垂　叡嶽を望みて下垂し
臨于鴨水之清漪兮　鴨水の清漪たるに臨み
集乎秋桂之瑤枝　秋桂の瑤枝に集まる
水冷々其澂澈兮　水 冷々として 其れ澂澈し
樹琅々以芬菲　樹 琅々として 以て芬菲たり
薄斂我翼　薄か我が翼を斂め
薄休我趾　薄か我が趾を休む

(注)＊増逝……飛び去る。＊叡嶽……比叡山を懸けるか。＊鴨水……鴨川のことか。＊懐旧林……陶淵明「帰園田居(其一)」に「羈鳥恋旧林」とある。

(訳)そこで、羽ばたき舞い上がり、叡嶽を望んで下降し、鴨水の清流に臨み、玉のような桂の枝に憩う(止まる)。水は冷ややかに澄み渡り、木はさざめき芳しい。いささか我が翼を収め、足を休める。

懐旧林而悲鳴兮　旧林を懐いて悲鳴すれば
雲幕々其曽々　雲幕々として 其れ曽々たり
邈修遠而無道兮　邈として修遠にして 道なく
聊倚南枝而制檜　聊か南枝に倚りて檜を制る
結蕙茝而為屋兮　蕙茝を結びて屋と為し
藉江離以為褥　江離を藉きて 以て褥と為す
樹翳鬱而多雨露兮　樹翳 鬱として雨露多く
濯我衣之埃塵　我が衣の埃塵を濯う

(注)＊曽々……重なる(「離騒」)。＊修遠……はるかに遠い。＊倚南枝……「巣南枝(南枝に巣くう)」で、故郷を慕う喩え。古詩の「行行重行行」に「胡馬依北風、越鳥巣南枝」の句がある。＊蕙茝……香草(「離騒」)。＊江離……香草(「離騒」)。

(訳)故郷の林を想い悲しく鳴けば、雲は黒々と重なり合う。はるか遠

くして道もなく(*無道に懸けるのであろう)、しばらく南の枝に倚って巣を作る。香草を束ねて屋根とし、別の香草を敷いて布団にする。木の蔭は鬱蒼として雨露を多く含み、私の衣の塵を洗ってくれる。

吸花蘂而為飲兮　花の蘂を吸いて飲と為し
摭秋実以為餐　秋の実を摭いて以て餐と為せば
維馥郁以馨香兮　維れ馥郁として以て馨香あり
言発我好音　言に我が好音を発すれば
音玲瓏以清越兮　音 玲瓏として 以て清越たりて
樹璘々以和　樹 璘々として 以て和す
月正午而天邇兮　月 正午にして天邇く
星辰粲而漢斜　星辰 粲として 漢 斜めなり

(注)*好音……『詩経』に見える。

(訳)花の蘂を吸って飲み物とし、秋の実を拾って食事とすると、馥郁と香りがよい。ここに我が麗しき声を発すれば、玲瓏として澄み渡り、木はさらさらと和す。月は南中し天近く、星はきらめき、天の川は斜めに横たわる。

窺閶闔以彷徨兮　閶闔を窺いて 以て彷徨し
弗寤於永夜之将央　永夜の将に央きんとするを寤らず
於戯修潔而芬芳兮　於戯 修潔にして芬芳たり
実得我所　実に我が所を得
聊逍遙以延佇　聊か逍遙して 以て延佇す

(注)*閶闔……天上界の門(「離騒」)。*延佇……「離騒」に「延佇乎吾将反」とある。

(訳)天上の門を窺って彷徨し、長い夜が尽きるのにも気づかない。ああ、清らかで香りも豊か。本当に我が所を得たと感じ、しばらく逍遙し佇む。

(参考)『貧陰集(詩集)』巻二「謁式部菅公謹賦呈」(弟処叔之遊菅公門下也、予作孤雁歌送之。弟辱礼遇、乃謝以羈鳥辞。故及之云。)

*繋がれた鳥とは自分のことか。

*展開・語彙ともに「離騒」に類似する。履軒が『楚辞』に傾倒していたことは『履軒古風』序に見える(「有倣于楚之騒」*楚とは『楚辞』、騒とは「離騒」)。『履軒小乗』中の京都への携帯した本の一覧にも『楚辞』の名が見える。

一一、丁亥早春自帰省浪華至、題所携梅花、上菅公

(丁亥早春　浪華に帰省するより至り、携うる所の梅花に題し、菅公に上る)

*丁亥は明和四年(一七六七)。早春、大阪に帰省して京都に戻ってきてからの作。

南国旧京梅　南国 旧京の梅
擔頭一枝馨　頭に擔けば 一枝の馨
帰来把似君　帰り来たり 把れば君に似
風韻至今清　風韻 今に至るまで清し

(訳)南国難波京の梅、頭に挿せば一枝分の香り。帰って来て取ってみ

るとあなたに似て、その香りは今も清らか。
＊梅の風韻を菅公に喩える。

一二、偶成

＊春の作。

有客立我門　客有り　我が門に立ち
剥啄驚孤眠　剥啄と孤眠を驚かす。
推枕起延之　枕を推して　起きて之を延き
相看両欣然　相い看て　両に欣然たり。
坐来無寒温　坐し来たれば　寒温無く
談笑在簡篇　談笑　簡篇に在り。
春花当窓発　春花　窓に当たりて発き
好鳥隔墻聞　好鳥　墻を隔てて聞こゆ。
遙園乞隣蔬　園を遙てて隣蔬を乞い
沽酒釀客銭　酒を沽うは客銭に釀る。
対酌無賓主　対酌　賓主無く
陶然倒青樽　陶然として青樽を倒く。
興尽君宜去　興尽きれば　君宜しく去るべし
莫厭我廬貧　我が廬の貧しきを厭う莫かれ。
百年只如此　百年　只だ此くの如し
庶無役我心　我が心を役する無きを庶う。

（注）＊剥啄……畳韻。コツコツ。＊相看両欣然……李白「独坐敬亭山」相看両不厭。＊談笑在簡篇……陶淵明「答龐参軍」に「談諧無俗調、所説聖人篇」とあるのを参照。＊興尽君宜去……「陶淵明伝」に「淵明若先酔、便語客、我酔欲眠、卿可去。其真率如此」とあるのを参照。

（訳）客が門の所に立ち、コツコツと独り寝を驚かす。起きあがって招き入れると、二人共喜び合う。
挨拶は抜きだ、話は書物のこと。春の花が窓辺に開き、鳥のさえずりが塀の向こうに聞こえる。
庭を越えて隣の野菜をもらいに行き、酒を買うのは客の金に頼る。賓主の別なく酒を酌み交わし、陶然として樽を傾く。
興が尽きれば帰ってくれ、私の庵の粗末さを心配なさるな。百年経ってもこのままだ、私が望むのはただ心を労するものがないことだけ。

一三、憶旧遊寄早士誉（旧遊を憶い、早士誉に寄す）

＊早士誉は早野仰斎（名辨之、字士誉）。「永輔義佐寄酒鶏子来、題簡背謝之」詩を参照。春の作。

春遊今如何　春遊　今　如何
臨風憶昔年　風に臨みて　昔年を懐う。
散歩城西路　「散歩す　城西の路
芳洲其未遠　芳洲　其れ未だ遠からず。
茅屋唯三間　茅屋　唯だ三間
炊麦待上賓　麦を炊きて　上賓を待す。
賓多坐不容　賓多くして　坐　容れず
命席続堂廉　席をして堂廉に続かしむ。
行厨各闘奇　行厨　各々奇を闘い

春醪如涌泉　　春醪（しゅんろう）涌泉の如し。

（注）＊茅屋唯三間……陶淵明「帰園田居（其一）」に「草屋八九間」とあるのを参照。＊命席続堂廉……『儀礼』「郷飲酒礼」に「設席于堂廉」とある。

（訳）春の遊びは今どうだろう、風に臨んで昔を思う。――当時、町の西の道を散歩すると、洲は近くにあり、茅屋はただ三間の広さしかなく、麦を炊いて客をもてなした。客が多くて座りきれず、家の外まではみ出した。破り子（弁当箱）はおのおの趣向を競い、濁酒は湧き出る泉のようだ。

高陽在何処　　高陽　何処に在りても
詩酒自不慚　　詩酒　自ら慚じず。
折花或簪頭　　花を折り、或いは頭に簪（さ）し
摘蔬旋入盤　　蔬を摘みて旋（たちま）ち盤に入る。
氈毹屡移坐　　氈毹（くゆ）屡々坐を移し
水厓又樹陰　　水の厓（きし）又た　樹の陰（かげ）。
酔歌互相属　　酔歌　互いに相い属（つら）なり
樽尽興未尽　　樽尽くるも興未だ尽きず。
沽酒水西村　　酒を水西の村に沽（か）うも
扁舟帰来遅　　扁舟　帰り来たること遅し。

（注）＊高陽……酒飲み。

（訳）酒徒はどこにいても、詩と酒だけは人に負けない。花を折って髪に挿し、野草を摘んで、すぐに皿に並べる。水の岸、木の陰と、敷物をあちこち移す。酔いまた歌い、酒樽が尽きても興は尽きない。川の西の村に酒を買いに行ったが、小舟はなかなか帰ってこない。

疑向桃花岸　　疑うらくは、桃花の岸に向かい
殷懃問秦代　　殷懃に秦代を問うかと。
又恐愛朴俗　　又恐る　朴俗を愛し
其中長孫児　　其の中に孫児を長（そだ）てるかと。
倏然斜陽裏　　倏然（しゅくぜん）として斜陽の裏（うち）
波揺一棹回　　波を揺らし一棹し回（かえ）る。
歓呼相労問　　歓呼して　相い労問し
洗觴更侑酔　　觴を洗いて　更に酔うを侑（すす）む。
不覚白日没　　覚えず　白日没し
夕露下我衣　　夕露　我が衣に下る。

（注）＊問秦代……陶淵明「桃花源記」では、桃源郷の民は秦時の難を避けこの村に来たということになっている。＊洗觴……「洗盞」は「前赤壁賦」にある。

（訳）桃花源に行って、懇ろに秦代のことを尋ねているのかと疑う。また、素朴な風俗を愛し、そこで子孫を育てようとしている（そこに定住してしまう）のではないかと心配になる。
急に日暮に近づき、棹挿しながら波を揺らして帰る、大声で声を掛け、杯を洗いさらに酔うよう勧める。気が付くと、太陽は没し、夜露が衣を潤していた。

初月出林端　　初月　林端に出で
皎々照花枝　　皎々として花枝を照らす。」

此興君何日　此の興 君 何れの日ぞ
索居我不再　索居して 我 再びせず。
尊前会相思　尊前 会ま相い思わば
帰鴻寄一詩　帰鴻に 一詩を寄せよ。

(注)＊尊前会相思……「長恨歌」に「天上人間会相見」とあるのを参照。
＊帰鴻……帰雁は春、北に帰る雁。

(訳)月は林の端に出て、皎々と花の枝を照らす。――このような興を君はまた楽しんでいるのだろうか。私は寂しく暮らし、二度と味わってはいない。酒樽を前にもし思い出すことがあれば、北に帰る雁に詩を託してくれ。

＊大阪での遊び(自由な生活)を懐かしむ。

一四、寒泉寄題。此君泉也、泉在筑紫竹中郷、柳川属邑（「寒泉」寄題。此れ君泉なり、泉 筑紫竹中郷に在り、柳川が属邑なり）(三章)

＊寄題とは他の土地で題詠すること。詩体は『詩経』に倣っていると思われる(『履軒古風』序に「有倣于三百篇(三百篇とは『詩経』のこと)」と言う)。末尾に「寒泉三章、二章八句、一章十二句」とある。

(第一章)
冽彼寒泉　冽たり彼の寒泉
柳城之南　柳城の南
孔潔且芳　孔だ潔く且つ芳し
其流潺々　其の流れ 潺々たり

(訳)清い彼の寒泉は、柳川の南にある。極めて清潔で芳しく、その流れは潺々としている。

可以汲兮　以て汲むべく
僻在幽陰　僻りて幽陰に在り
鳥唖々兮　鳥 唖々たり
除其垢塵　其の垢塵を除く

(注)＊可以汲兮……『易経』「井卦、九三」に「可用汲、王明並受其福」とあり、「九五」に「井冽、寒泉食」とある。

(訳)汲むに値し、静かな蔭にある。鳥が楽しげに鳴き、その塵を洗い除く。

(第二章)
冽彼寒泉　冽たり彼の寒泉
在竹之郷　竹の郷に在り
其流潺々　其の流れ 潺々たり
孔潔且芳　孔だ潔く 且つ芳し

(訳)清い彼の寒泉は、竹中郷にある。その流れは潺々として、極めて清潔で芳しい。

于以薦之　于に以て之を薦め
于彼公堂　彼の公堂に于いてす
豈弟君子　豈弟たる君子
錫以嘉名　錫うるに嘉名を以てす

（注）＊豈弟君子……『詩経』「大雅」「泂酌」に「凱弟（＝悌）君子、民之父母」とある。＊錫以嘉名……「離騒」に「肇錫余以嘉名」とある。

（訳）ここに、お上に薦め、和らげる君子はよき名を与える（高く評価する）。

（第三章）

嘉名伊何　嘉名 伊れ何
此君之比　此れ君の比
孔潔且芳　孔だ潔く且つ芳し
四時弗改　四時 改めず

（訳）よき名とは何か。それは君の輩ということ。極めて清潔で芳しく、何時も変わらない。

君子攸則　君子の則る攸
我其靡愧　我 其れ愧ずる靡し
此君之栄　此れ 君の栄
歌之詩之　歌い詩にせん

（訳）君子が則とする所に、私は羞じる点がない（きちんとしている）。これは君の誉れだ。歌にし詩にしよう。

一物之懿　一物の懿
君子弗遺　君子遺さず
矧伊人矣　矧んや 伊の人をや
庶無逸才　庶くば才を逸す無きを

（訳）すばらしい物は、君子は見逃さない。この人ももちろんそうだ。この人の才能を見落とすことがありませんように。

一五、宿居易館（居易館に宿る）

＊居易館は、履軒の弟子の竹島簣山の居所。春の作。

凄々雨余天　凄々たり 雨余の天
梅柳澹暮色　梅柳 暮色に澹し。
杖履偶経過　杖履 偶ま経過す
西門隠士宅　西門隠士の宅。
庭静草芊々　庭は静かに 草芊々たり
鳥啼春寂々　鳥 啼き 春寂々たり。
杯盤随有無　杯盤は有無に随せ
微酔情自適　微さか酔えば 情 自ら適う。
経史譚方濃　経史の譚 方に濃に
茶鼎濤淅瀝　茶鼎の濤 淅瀝たり。
憂病憑君医　憂病は君が医に憑り
留連興未索　留連として 興 未だ索きず。
借問夜如何　「借問す 夜は如何
且恐塗昏黒　且つ恐る 塗 昏黒たるを」と。
主人援我止　主人 我を援きて止め
相対双肱曲　相対して 双り肱を曲ぐ。
欲眠聞鐘音　眠らんと欲して鐘音を聞き
謬疑禅房宿　謬ちて禅房の宿かと疑う。

(注)＊肱曲……『論語』「述而篇」に「飯疏食、飲水肱曲而枕之、楽亦在其中矣」とある。

(訳)凄々たる雨の日、梅と柳は暮色に霞む。杖つき履穿き、たまたま西門の隠者の宅を通り過ぎる。
庭は静かに草は茂り、鳥は啼き春は寂々。食器はあるに任せ、ほろ酔い気分が心地よい。
経史の話も闌に、茶釜が静かに沸き立つ。鬱病をあなたに癒され、興はまだ尽きない。
「ちょっとお尋ねします、今夜はどうされますか、道も真っ暗ですよ」と、主人は私を引き留め、相対して肱を曲げ枕にする。眠ろうとして鐘の音を聞き、禅房に宿っているかと疑う。

＊隠者(竹島簣山か)と語らう。今の言葉で言うとカウンセリングか。学問の話に飢えていた様子がわかる(「偶成」を参照)。

一六、東山口号

＊口号は口を衝いて出る即興の作。春の作。

乗晴訪花信　晴るるに乗じ 花の信りを訪えば
天寒春色遅　天寒くして 春色遅し。
擬伴少同調　伴を擬るに 同調少なく
卜遊多屈指　遊びを卜すれば 屈指多し。
東山自有妓　東山 自ら妓有り
謝公不酔帰　謝公 酔わずして帰る。

(注)＊謝公……晋人謝安は会稽の東山に隠遁し、芸妓を伴って遊んだ。李白「示金陵子」詩に「謝公正要東山妓、携手林泉処処行」、李白「携妓登梁王棲霞山孟氏桃園中」詩に「謝公自有東山妓」の句がある。＊東山……東山には料亭も多く、遊山の客はよく娼妓を連れて訪れたらしい。有名な花街祇園も近い。中島棕隠『鴨東四時雑咏抄』(一八二六)に「瑞竜山南禅寺、……寺前酒店亦有声価、遊客毎携娼妓、嬉娯于其間」とある(『葛子琴・中島棕隠』江戸詩人選集六、岩波書店、一九九三)。

(訳)晴れに乗じて花の便りを問えば、天候が寒く春はまだまだだ。伴を募っても同調する人は少ないのに、遊びに誘うと賛成する人が多い。東山にはもとより芸妓が多いが、謝公は酔わずに帰った(から見つからない)のだ。

一七、古意

＊古意とは懐旧の念。詩題の名。春の作。

誰灑相思涙　誰か相思の涙を灑ぎ
寄之大江流　之を大江の流れに寄せん。
江流再不復　江流は再び復らず
南去日悠々　南に去りて日々悠々たり。
誰題加餐字　誰か加餐の字を題し
繫之北帰鴈　之を北に帰る鴈に繫がん。
帰雁声々度　帰雁 声々と度り
天高不可攀　天高くして攀ずべからず。
孤客労夢魂　孤客 夢魂を労す

南国春応残　　南国 春 応に残すべし、と。

(注)＊日悠々……『履軒古風』巻三「長渠卜居答人(又)」(帰阪後の作)に、京都行について「朱門雖良楽、客思日悠悠」との表現が見える。

(訳)誰が相思の涙を流し、それを大河に寄せるだろう。だが、川は流れて戻らず、南に去り、日々悶々とする。
誰が私を思い手紙を書き、それを北に帰る雁に結ぶだろう。だが、帰雁は鳴きながら渡るも、天は高く、上ることができない。
孤独な旅人はただ空しく、南国の春が終わろうとしているのを夢見る。

＊大阪への思いを縷々として訴える。

一八、奉酬伯兄及諸友見懐諸作
(奉みて伯兄及び諸友に懐わる諸作に酬ゆ)

＊梅雨の作。

濛々黄梅雨　　濛々たる 黄梅の雨
寂々孤客館　　寂々たる 孤客の館。
故園南望目　　故園 南に望み目
親朋隔水雲　　親朋 水雲を隔つ。
閑中俯懐旧　　閑中 俯して旧きを懐い
不知客入門　　客の門に入るを知らず。
忽擲金玉声　　忽ち金玉の声を擲げ
驚起跪読之　　驚き起きて跪きて之を読む。
累々瓊瑤光　　累々たる瓊瑤の光
照我草堂裏　　我が草堂の裏を照らす。
群英満堂酒　　群英と満堂の酒と
吾魂便欲飛　　吾が魂 便ち飛ばんと欲す。
胡料彩毫下　　胡ぞ料らん 彩毫の下
輙及朽廃姿　　輙ち朽廃の姿に及ぶを。
慚汗泚然流　　慚汗 泚然として流れ
沾衣与涙俱　　衣を沾らす 涙と俱に。
睽離如昨日　　睽離すること 昨日の如し
倏已離寒暑　　倏として已に寒暑 離る。
豈無詩酒伴　　豈に詩酒の伴無きや
況有泉石美　　況んや泉石の美有るをや。
新交歓未洽　　新交の歓び未だ洽ねからず
衷情向誰裁　　衷情 誰に向かいて裁べん。
篇什半述旧　　篇什 半ば旧を述べ
歓来悲即生　　歓来たれども 悲しみ即ち生ず。
多謝有声画　　多謝す 声画有るを
須臾接寵光　　須臾にして寵光に接す。
更知脊令原　　更に知る 脊令の原の
草色描不成　　草色は描けども成らざるを。

(注)＊脊令原……『詩経』「小雅」「常棣」に見える。兄弟が互いに難を救う喩え。

(訳)しとしと梅雨の雨が降り、孤客の館は寂しげだ。南に故郷を望んでも、親朋は水や雲の彼方にいる。
閑中、伏して昔を懐い、客が来たのにも気づかない。急に声を掛けら

れ、驚き起きて手紙を拝読する。
数多の玉の光が、私の草堂を照らす。並み居る秀才に数多の酒。ああ、今すぐ飛んで帰りたい。
なんと美しき筆跡はすべて朽ちた私を思うもの。慚愧の汗がしとど流れ、涙とともに衣を濡らす。
別れたのは昨日のようなのに、すでに季節は一巡り。京都にも詩酒の友はいる、まして風景は美しい。
だが、新しい付き合いはいまだ打ち解けず、この気持ちを訴える相手がいない。文章を書いても半分は昔のこと、歓びを感じてもすぐに悲しくなる。
このように生き生きとした知らせをいただいたのはうれしいが、脊令の原の草色は描こうと思っても描けないことを思い知らされた(弟思いの兄も自分の窮状を救うことはできないのだと思い知らされた)。
＊自分を思ってくれている大阪の人々に感激し、涙している。自分を「朽廃姿」、自分の住まいを「孤客館」と表現。

一九、碧山楼陪菅公、賦奉酬
(碧山楼にて菅公に陪し、賦して奉みて酬ゆ)

＊碧山楼とは宴会の間か。夏の作。

把酒上高楼　酒を把りて　高楼に上り
凭檻繙黄巻　檻に凭りて　黄巻を繙く。
皎月辨秋毫　皎月　秋毫を辨じ
薫風満衣襟　薫風　衣襟に満つ。
酷吏喪気焔　酷吏も気焔を喪い
燭奴就棄捐　燭奴も棄捐に就く。
礼数寛野人　礼数は野人に寛く
促席劇談論　席を促くして劇しく談論す。
慚懐散木質　慚ず、散木の質を懐き
空懸燕台金　空しく燕台の金に懸かるを。

(注)＊酷吏……大暑の擬人的表現。＊燭奴……蝋燭の擬人的表現。＊燕台……「隗より始めよ」の故事で有名な燕の昭王が、台を築いてその上に黄金を置き賢者を招いた故事(『蒙求』「燕昭築台」、鮑照「放歌行」『文選』巻二八。他『史記』「燕召公世家」を参照)。君主に優待されること。
(訳)酒を取って高楼に登り、欄干に倚って書物を繙く。明月は物をくっきり浮かび上がらせ、薫風は衣に満ちる。
酷暑も退散し、蝋燭もお払い箱。野人には礼儀もゆるくされ、膝を突き合わせて議論する。
生来の役立たずが、無駄に重用されていることを恥ずかしく思う。
＊菅公と親しく語らいあった様子が表現されている(跋文を参照)。ただ、結びで自らの無能を嘆く。あまりアピールできなかったか。学問について議論したようだが、履軒の知的興味を満たす話ではなかったというのが実情か。
＊『懐徳堂考』下六三頁に「菅家の碧山楼に在ること一年」とあり、碧山楼を履軒の居所のように言う(『中井竹山・中井履軒』も同様)が疑わしい。『履軒古風』巻三「奉酬吏部菅公三首」中にも「空懐碧山楼、山色今何如、黄葉已揺落、白雪正婆娑、詩賦君所独、樽酒我嘗侍」とある。眺めのい

い、宴を催す場所であろう。

二〇、鴨林納涼

＊鴨川の川床であろう。おそらく夏の作。

渓林不盈尺　渓林 尺に盈たず
酔倚水中牀　酔いて倚る 水中の牀
喬樹漏星月　喬樹 星月を漏らし
露気満衣裳　露気 衣裳に満つ

（訳）川辺の林は一尺に満たず、酔って川床に寄りかかる。高木から月が漏れ出で、露の気が衣に満ちる。

＊美しい情景を詠む時もどこか悲し気。大阪を詠う時生き生きしているの（「憶旧遊寄早士誉」）とは対照的である。

二一、九歎　節二

＊九つあった中の二つ（以下の「歎毀」「歎拘」）だと言うが、『楚辞』に倣って題名だけであろう。

歎毀（右　毀りを歎く）

＊原文では末尾に「右歎毀」とあるのを冒頭に移した。

何浮雲之靡日兮　何ぞ浮雲の日を靡ぐ
当中天而喪光　中天に当たりて光を喪う
白日胡瑕兮　白日 胡ぞ瑕あらん
鬱蒙々以冥々　鬱蒙々として以て冥々たり
我陟喬山兮　我 喬き山に陟り
遼出乎雲霧之上　遼かに雲霧の上に出づれば
天晴朗而無翳兮　天 晴朗たりて翳無し
日嚇々以炫々　日 嚇々として以て炫々たり
俯瞰浮雲之態兮　浮雲の態を俯瞰し
憫乎下土之人　下土の人を憫む

（訳）どうして浮雲が日を遮り、空を覆って光を奪うのか。太陽は完璧なのに、濛々とまた黒々としている。私は高山に登り、遙かに雲の上に出れば、天は晴れわたり翳りなく、日は燦々と輝く。浮雲の様子を俯瞰し、地上の人を憐れむ。

夫子思之明哲兮　夫れ子思の明哲たる
悼道路之荒蕪　道路の荒蕪するを悼み
発憤著書兮　発憤して書を著し
坦履祖武　坦として祖武を履むも
何小人之無憚兮　何ぞ小人の憚り無き
指為回邪之塗　指して回邪の塗と為す
夫子輿之抗言兮　夫れ子輿の言を抗うや
闢仁義之充塞　仁義の充塞するを闢くも
何衆人之嫉妬兮　何ぞ衆人の嫉妬する
擠為従横之学　擠いて従横の学と為す

(注)＊発憤著書……もと司馬遷が『史記』を書いたことについて言う。子思は『中庸』などを著したとされる。＊子輿……孟子のこと。＊従横之学……縦横に同じ。諸子百家の一つに縦横家があった。ここでは権謀術数のこと。

(訳)子思は聡明で、世の道が荒れるのを痛み、発憤して書を著し、坦々と先人の後を継いだ。だが、何と小人物の恥知らずなことか。よこしまな道だと決めつけた。

孟子は激しく議論して、仁義の閉塞を開いた。だが、何と衆人の嫉妬深いことか。権謀術数だと蔑んだ。

蒼蠅之哂黄鵠兮　蒼蠅の黄鵠を哂うに
以弗食乎竈径之遺穀　竈径の遺穀を食らわざるを以てす
蚯蟥之哈龍蛇兮　蚯蟥の龍蛇を哈うに
以弗飲乎洗旁之弃水　洗旁の弃水を飲まざるを以てす
以嶮隘之鄙心兮　嶮隘の鄙心を以て
量乎睿知之霊府　睿知の霊府を量るも
夫胡相容兮　夫れ胡ぞ相い容れんや
所以紛乎毀誉　毀誉に紛れる所以なり

(注)＊竈径……『礼記』「月令篇」では「竈陘」に作る。

(訳)蠅は、大鳥が竈の周りの残飯を食べないことを嘲り、蚯蚓は、龍が洗い場の廃水を飲まないことを嘲る。このように、狭く険しく卑しい心で英知の心ばえを判断しようとしても、どうして可能だろうか。毀誉褒貶に終始するだけだ。

孰生乎今之世兮　孰か今の世に生まれ
能避乎黜点之汚　能く黜点の汚れを避けん
辨毀誉之懣々兮　毀誉の懣々たるを辨じ
徒作斯煩言　徒らに斯の煩言を作す
維守心之直諒兮　維れ心の直諒たるを守り
死至矢無遷　死至りても遷る無きを矢う
衆人之言兮胡足恤　衆人の言　胡ぞ恤うるに足らん
与昔人期兮其無慚　昔人と期す　其れ慚ずる無きを

(訳)今の世に生まれて、誰が讒言の汚れを避けることができよう。毀誉の煩いを弁じ、空しくこの繰り言をする。ここに、正直な心を守り、死んでも節を曲げないことを誓う。衆人の言など気にする必要はない。古人に恥じないことを約束する。

＊誹りを嘆く賦。高みに登り、世界を俯瞰するのが「鵩鳥辞」と共通する。俗世で誹りを免れることはできない、その中で、私は良心に恥じないことだけを行い、昔の賢人に恥じないことだけを行いたいと言う。「坦履祖武」に、履軒という名の含意を読みとることができる。ここに述べられた内容は、その後の履軒の生き方を暗示するかのようだ。履軒の生き方宣言と言えようか。

＊「幽情賦」「履軒吟」(ともに『履軒古風』巻一所収)でも、古人に恥じることなき人生を誓う。

歎拘(右　拘みを歎く)

＊原文では末尾に「右歎拘」とあるのを冒頭に移した。

日月之繫乎天兮　　日月の天に繫り
沛旦夜而周旋　　沛として旦夜　周旋し
無始而無終兮　　始め無く終り無し
若無端之環　　無端の環の若くんば
孰上而孰下兮　　孰れが上にして孰れが下ならん
若黄白之卵　　黄白の卵の若く
赫煌々無改其度兮　　赫　煌々として其の度を改むる無くんば
胡中虧之可言・　　胡ぞ中虧の言うべき

(注)＊無端之環……太陽や月の軌道を言うのだろう。＊若黄白之卵……渾天説か。

(訳)日月は天に懸かり、朝も夜も盛んに巡り、始めもなく終わりもない。もし、端のない輪のようならば、どちらが上でどちらが下になるのだろう。もし、卵の黄身と白身のように輝いて不動ならば、満ち欠けをどう説明するのか。

維中之与戾兮　　維れ中ると戾くと
自人之国　　人の国よりす
盈之与食兮　　盈ちると食すると
自人之目　　人の目よりす
夫以人目之眇兮　　夫れ人目の眇と
与人国之蔽　　人国の蔽さきとを以て
以規乎大之日兮　　以て大なる日を規り
槩乎臣之月　　臣の月を槩り
欲其無我違兮　　其の我と違う無きを欲するは
何為計之憨且拙　　何為れぞ計の憨かにして且つ拙き

(校勘)中之島図書館本は「人之国」を「人云国」に誤る。

(訳)日が昇り沈むのは、人の国から言ったものだ。月の満ち欠けも、人の目から見たものだ。そもそも、人の小さな目と人の国の小ささでもって、大いなる太陽を測り、家来である月を測り、自分に合うよう求めるのは、何と愚かで拙い考えはないか。

仰食而修徳兮　　食を仰ぎて徳を修むるは
何有不可　　何ぞ可ならざる有らん
弗食而不修兮　　食せざれば修めざるは
云如之何　　之を如何せんと云う　＊云にか(?)
貶饌而責兮　　饌を貶めて責め
擊鼓而救　　鼓を擊ちて救うも
日月其解顔兮　　日月　其れ解顔し
驩然而笑　　驩然として笑う
歴失而慶兮　　失を歴て慶し
翳雲而賀　　雲に翳れて賀するも　＊天を無批判に敬っても
日月其含愠兮　　日月　其れ愠りを含み
咄爾而呵　　咄爾として呵る

(訳)日食や月食を仰いで徳を修めるのは、結構なことだ。だが、日食や月食がなければ徳を修めないのは、どうしたことか。

お供え物を乏しくして天を責めたり(普通は天を怒らせるような行為)、攻撃の合図である太鼓を援護する場合に打っても(世の道理に反するような行為)(?)、日月は(おかまいなしに)相を崩し、にっこりと笑う(こともある)。
過失を犯して祝ったり、黒雲垂れ込めて祝ったりしても(両者とも本来反省すべき事態)(?)、日月は(おかまいなしに)腹を立て、こらっと怒る(こともある)。

夫上古神聖之知兮　夫れ上古の神聖の知すら
固有未徧　固より未だ徧からざる有り
豈有意乎開設兮　豈に開設に意有りて
故立庸主之鑒　故に庸主の鑒を立てんや
後人之知兮　後人の知も
亦有所届　亦た届る所有り
飛籌布数兮　飛籌し布数し
植表而推秋　植表し推秋し
毫弗遁兮　毫も遁わざれば
千載可致　千載も致すべし
孰牽於先習兮　孰か先習に牽かれ
病於後知　後知を病まん
孰岐数与理兮　孰か数と理とを岐り
乗牆而左右　牆に乗りて左右せん

(校勘)牆……原文では片偏。

(注)＊飛籌布数……籌は竹の棒。飛籌も布数も占いすることであろう。引いて、籌も数もはかりごとの意がある。＊植表……目標を立てる。

(訳)古代の聖人の知にも至らないところがあった。どうして、わざわざ意図的に凡庸な君主の規範を立てるだろう。
後世の人の知でも優れたところがある。
十分に推し量り目標を立て、時を見極め、少しも過失がなければ、千年先のこともわかる。
誰が昔の知恵に引きずられて、後世の知恵を損なうだろう。
誰が定めと道理とを区別できずに、両者の間で迷うだろう。

夫地之小兮　夫れ地の小さきや
万国棊着　万国 棊着し
為君徳食兮　君徳の為に食せば
万君斉淑慝耶　万君 淑慝を斉しくせんや
万国之俗兮　万国の俗は
有微有悪　微しき有り 悪しき有るも
従日月而観兮　日月より観れば
何曽有疏戚　何ぞ曽て疏戚有らん

(訳)そもそも、地は小さくて、万国が密集している。君主の徳のために日食月食があるなら、万国の君主は徳を同じくするのか。
万国の風俗は卑しいのも良くないのもあるが、日月から観れば、どうして親疎の別があろう。

太虚為室兮　太虚を室と為し
日月為目　日月を目と為し
若鋼者地也　鋼の若きは地なり

如肉与菜者国也　　肉と菜との如きは国なり
渟之停者海也　　渟の停まるは海なり
沫之浮者島嶼也　　沫の浮くは島嶼なり
氛埃之棲者人也　　氛埃の棲まるは人なり
日月雖至明兮　　日月　至明なりと雖も
烏能別乎氛埃之小大与楕圜哉　　烏んぞ能く氛埃の小大と楕圜とを別たんや

（注）＊『履軒古風』「会虞　観天地第一」、『天経或問雛題』共に、地・人の小ささを強調する。

（訳）天空は部屋で、日月は目で、鍋のようなのが地、（その中の）肉と野菜が国であり、汁の留まっているのは海である。泡の浮いているのは島で、塵のじっとしているのが人である。
日月は極めて聡明でも、どうして塵の大きさと形とを区別できようか。

＊高みに立ち、世界を俯瞰するという点が先の賦と共通する。世間の人が成見に囚われて、天人相関を信じているのを喝破する。履軒は、伝統に囚われない科学的な宇宙観を持っていたとされる。その精神的根拠をここに見ることができる。

＊題からして『楚辞』を意識している。あるいは日本版「天問」と言えようか。

（参考）『奠陰集（文集）』巻五「与弟処叔」に「郷也見示九嘆之二、切中異言之病、深得聖字之要、屈宋之時、豈有是識也哉。至於其字琢句磨、古色鬱然、所謂奴僕命騒者、非邪。愚兄実欲焚筆研。」とある。

＊奴僕命騒（奴僕もて騒に命ず）……杜牧「李長吉歌詩叙」で李賀を称える言葉。李賀をもう少し生かしておけば「離騒」も奴隷とするような大家となったであろう、の意。

二二、遊高台寺（高台寺に遊ぶ）

＊高台寺は東山にある、秀吉の北の政所ゆかりの寺。春の桜と秋の萩が有名であった（『都名所図会』安永九年（一七八〇）、『日本名所風俗図会8京都の巻Ⅱ』角川書店、一九八一による）。寛政元年（一七八九）を始め、三回の火事を経て今では建物の多くは消失したが、履軒が訪れた当時は堂々たる伽藍が存在した。秋の作。

金碧梵王殿　　金碧の梵王殿
豪華在当年　　豪華　当年に在り
満地秋草露　　満地　秋草の露
唧唧聴虫音　　唧唧として虫音を聴く

（訳）光り輝く大伽藍、当時は豪華だった。
今は地面いっぱい秋草の露、チッチと虫が鳴く。

＊往年の栄華と今（秋）の静けさとを対照する。「鴨林納涼」と同じく寂しげに詠う。

（参考）『奠陰集（詩集）』巻二「弟処叔与諸子高台寺賞萩花書報曰花不適詩料因有此寄」（弟処叔　諸子と高台寺に萩花を賞し、書もて報じて「花　詩料に適わず」と曰う。因りて此の寄有り）と題する詩がある。

そこで、竹山は、萩の花を詠まなかった履軒に「花は咲いているのに酒ばかり飲んで詩を作れなかっただけだろう」と揶揄している。ちなみに、寛政十一年(一七九九)刊の『都林泉名勝図会』には、「秋高台寺に過ごして芳宜の花を見る」と題する竜公美作の七絶がある。

二三、答早士誉(早士誉に答う)(三首)

＊早士誉は早野仰斎(名辨之、字士誉)。「永輔義佐寄酒鶏子来、題簡背謝之」詩参照。仰斎から栄達を祝う内容の書が届いたのだろう。

野人弊衣裳　野人 弊れし衣裳もて
日接黻冕光　日々 黻冕の光に接す。
浮游与時俱　浮游は 時と俱に
豈是貧寵栄　豈に是れ 貧 寵栄せん。

(訳)粗末な衣を着て、日々礼服のお偉い方と接す。ただ時任せにぶらぶらする。貧乏人がどうして恩寵に浴しよう。

其二

君作南郷遊　君は南郷の遊びを作し
吾為北京羈　吾は北京の羈と為る
旧歓若相思　旧歓 若し 相い思わば
恐在垂綸時　恐らくは 垂綸の時に在り

(訳)君は南の郷に遊び、私は北の京都で旅人となる。昔のことを思い出すとすれば、きっと共に釣りした時のことだろう。

其三

門無五株柳　門に五株の柳無く
又無黄花園　又た黄花の園無し
閑却淵明廬　閑は却って淵明の廬
空望白衣人　空しく白衣の人を望む

(注)＊陶淵明は家の前に五株の柳を植え、「五柳先生伝」を著した。また隠逸の境地を詠った「飲酒(其五)」中の「採菊東籬下」は有名。

(訳)門に五株の柳もなく、菊の花園もない。だが静けさだけは陶淵明の庵と同じ。空しく世捨て人に憧れる。

＊心は既に陶淵明になっている。「白衣の人」(以下「南帰途中口号」の「未化旧素衣」を参照)に対するあこがれを表現。

二四、懐魚膾戯賦(魚膾を懐い戯れに賦す)

＊魚膾は刺身。鰯の刺身を懐かしむ。秋の作。

洛城一夜秋風動　洛城 一夜 秋風動く
江南魚膾今如何　江南の魚膾 今 如何。
氷盤盛来白銀片　氷盤に盛り来たる 白銀の片
蔔絲襄花顔色無　蔔絲 襄花 顔色無し。
芥漿澆下著一攪　芥漿に澆し下し 著けて一攪すれば
甘脆芳潔絶比喩　甘脆 芳潔 比喩を絶す。
海中鱗物豈可数　海中の鱗物 豈に数うべけんや
至味却属至少者　至味 却って 至りて少なき者に属す。

諢名単喚魚旁弱　諢名　単えに喚ぶ　魚旁に弱
姓名嘗逸神農書　姓名　嘗て逸す　神農の書。
張翰元来不相識　張翰　元来　相い識らず
所以偏懐江中鱸　所以に偏えに江中の鱸を懐う。
試把鱸膾相陪侍　試みに　鱸の膾を把りて　相い陪侍すれば
厨下只好飼婢奴　厨下　只だ婢奴を飼うに好きのみ。
帰心今日在此物　帰心　今日　此物に在り
口頭一占吊餓肚　口頭　一たび占れば　餓肚を吊る。

（校勘）著一攪……『洛汭妥囊』手稿本、中之島図書館本、『履軒古風』手稿本は「著」に作るが、『履軒古風』北山鈔本は「箸」に作る。

（注）＊張翰……張翰が故郷の鱸を思い、官を辞して故郷に帰った故事（『蒙求』「張翰適意」）。「陶潜帰去」と対で述べられる。

（訳）京都である夜、秋風が吹いた。ああ、大阪の刺身は今どうだろう。透き通った皿に盛りつければ、大根の妻も茗荷も顔色を失う（たじたじ）。山葵醤油に浸けて一掻きすれば、甘く歯触りよく香り豊かで清らかなことは言語を絶する。海の生き物は数え切れないが、美味しい物は多くない。渾名は魚偏に弱い。姓名は神農の書（『本草』）から漏れている。張翰はこれを知らなかったので、ただ川の鱸を思ったのだ。試しに鱸の刺身を持参し相伴させると、台所でしもべに食べさせるしかないだろう。私が帰りたいのはこのため。一言口に出すだけで腹が鳴る。

＊大阪の刺身を絶賛。大阪を詠う時はなんと生き生きしていることか。

（参考）『賓陰集（詩集）』巻二に「得弟処叔思弱魚膾長句和以一絶」があり、秋の陽射しが強すぎて味噌漬けにしないと送れないと返している。

二五、閑歩偶成

＊秋の作。

起来曳短筇　起き来たり　短筇を曳き
散歩出郭門　散歩し　郭門を出づ。
日出東岑上　日は東の岑の上に出で
爽気鳥雀喧　爽気に　鳥雀喧し。
軽霧籠竹樹　軽霧　竹樹を籠み
山色鬱不辨　山色　鬱として辨ぜず。
川水雨余多　川の水は　雨余に多く
滔々流我前　滔々として　我が前を流る。
板橋追随者　板橋に　追随する者は
芋栗装其擔　芋栗を　其の擔に装う。
秋景今已晩　秋景は　今　已に晩く
戚焉感我心　戚焉として　我が心に感ぜしむ。
徘徊忘朝餓　徘徊して　朝の餓えを忘れ
又過水東村　又た　水東の村を過ぐ。

（訳）朝起きて短い杖を突き、散歩して町の門を出る。太陽は東の峰の上に出て、爽気の中　鳥が騒ぐ。薄い霧が竹林に立ちこめ、山はおぼろにかすんで見える。川の水は雨後に増して、滔々と私の前を流れる。後ろから板橋にさしかかった人は、芋や栗を背負っている。秋の終わりを感じ取り、しんみりとした気分になる。徘徊して、空腹も覚えずに、また

川の東の村を過ぎる。

＊秋の郊外への散歩を詠う。「秋景今已晩、戚焉感我心」は跋文の「戚焉有感于懐」という文句を参照。

二六、九月十三夜

＊秋の作。

晩秋十三夕　晩秋の十三夕
清賞比中秋　清賞 中秋に比す
深知古人意　深く知る 古人の意を
満盈不再来　満盈 再びは来ず

(注)＊九月十三夜……日本では、陰暦九月十三夜の月は「のちの月」として、八月十五夜に次いでもてはやされた。履軒は「もろこしの今にも人はしら菊の露の葉末の秋の夜の月」(『越吟』第三)という和歌も詠んでいる。

(訳)晩秋十三夜、その美しさは中秋の明月に匹敵する。古人が親しんだのもよく理解できる。(これが終われば)満月は二度と来ないから。

＊「満盈不再来」はあるいは自分の境遇になぞらえるか。

二七、月下独酌、懐川上習之、此寄 十三日
(月下に独酌し、川上習之を懐い、此れを寄す)

＊川上習之は『履軒古風』巻三に「答習之」がある。また竹山『奠陰集(詩集)』にも頻出する。例えば、巻二に「予近因貧断酒習之有詩見寄依韻和答」と題し「虚名噪世偽青蓮、多債難裁独酌篇、但教交友相邀飲、一斗依然旧酒仙」と詠む。酒飲み同士ならではの詩か。秋の作。

独対鳳城月　独り鳳城の月に対すれば
逝事萃我心　逝きし事 我が心に萃まる。
独酌不成酔　独酌し 酔いを成さず
愀然懐故人　愀然として 故人を懐う。
同社多才子　同社 才子多きも
詩酒偏思君　詩酒は 偏えに君を思う。
与君淀水舟　君と 淀水の舟で
幾載共金樽　幾載か金樽を共にす。
今我如別鶴　今 我は別鶴の如く
哀鳴慕旧林　哀鳴し 旧林を慕う。
一声遙相贈　一声 遙かに相い贈るも
情急不択音　情 急にして 音を択ばず。
借問淀水月　借問す 淀水の月
一斗詩幾篇　一斗 詩幾篇。
秋老江魚肥　秋老いて 江魚肥ゆ
対酌復誰人　対酌するに 復た誰人かあらん。
偏憐山頭月　偏えに憐む 山頭の月の

照君詩酒船　　君が詩酒の船を照らすを。

（校勘）『履軒古風』には「川上」がない。

（注）＊別鶴……陶淵明「擬古」に見える。＊慕旧林……陶淵明「帰園田居（其一）」に「羈鳥恋旧林」とある。陶淵明には「帰鳥」と題する詩もある。

（訳）独り都の月に向かうと、過ぎ去ったことが次々と心に浮かぶ。独酌して酔うこともできず、気が滅入り旧友を懐かしむ。懐徳堂には才子が多かった。でも、詩と酒とで思い出すのは君。君と淀川で舟に乗り、何年酒樽を共にしたことか。今私は独りぼっちの鶴のように、哀れに鳴いて、故郷の林を慕う。一声　声を届けようとするが、情が極まってまともに鳴けない。お尋ねする、淀川の月よ。一斗の酒で幾篇詩が作れるか。秋が深まって川魚も太ったことだろう。共に酌をする人はいるか。ひたすら不憫に思うのは、山の上に出ている月が君の詩と酒の船を照らすこと。

二八、丁亥仲冬辞京南帰、席上賦上菅公（丁亥仲冬京を辞して南に帰る、席上賦して菅公に上る）（二首）

＊丁亥仲冬は明和四年（一七六七）十一月。

長鋏欲帰去　　長鋏よ　帰り去らんと欲するも
難裁別離心　　別離の心　裁し難し
慚無鶏鳴效　　鶏鳴の效　無く
辜負孟嘗恩　　孟嘗の恩に辜負するを慚ず

（注）＊長鋏……『戦国策』『斉策』に、孟嘗君に仕えた馮驩（ふうかん）が、薄遇を嘆いて「長鋏帰来」の歌を歌い、厚遇を得た故事がある。竹山『篁陰集（詩集）』巻二「擬送友人下第還郷」にも「馮鋏向誰弾」とあり、挫折して帰郷する人の無念の表現に、この故事を使っている。

（訳）長剣よ、私はこれから帰るが、別離の心は表現しがたい。ろくな才能もなく、賢君のお役に立てなかったことを申し訳なく思う。

（参考）下二句は『懐徳堂考』下六三頁に引かれている。

其二

誰憐窮巷士　　誰か憐む窮巷の士を
曽為知己伸　　曽て知己のために伸ぶるも
帰去蒹葭岸　　蒹葭の岸に帰り去り
引領朔鴈天　　領（えり）を引く　朔鴈の天

（訳）誰がこの貧乏な士を憐れもう。かつては知己を得て意を伸ばすことができたが、今、葦の繁る岸辺へと帰り、首を伸ばして雁の帰る北の空を望むのだ。

＊自らを「窮巷士」と表現。

二九、菅公賜褌（うちかけ）為贐、賦此奉謝（菅公褌を賜り贐（はなむけ）と為し、此を賦して奉（つつし）みて謝す）

縹々神女機　　縹々たる神女の機もて
剪破嶺頭雲　　嶺頭の雲を剪破し、

裁作遊仙服　裁ちて遊仙の服を作れば
霞彩帯波文　霞の彩に　波文を帯ぶ。
離披春洞裏　春洞の裏に離披すれば
石床不覚寒　石の床にも寒さを覚えず。
豈料雲外物　豈に料らんや　雲外の物
落在野人身　落ちて　野人の身に在るを。
再拝感何極　再拝し　感　何ぞ極まらん
別涙俱潺々　別涙　俱に潺々たり。
帰去充斑衣　帰り去りて　斑衣に充つれば
膝下即昼錦　膝下　即ち昼錦。

(注)＊春洞……『和漢朗詠集』「仙家」菅原文時「山中有仙家」詩「石床留洞嵐空払」をふまえるか。そうすれば、自らを出家して洞穴で暮らす仙人に喩えていることになる。＊膝下即昼錦……昼錦は錦の衣を着て昼行くこと。出世して故郷に帰る喩え。『蒙求』下「老萊斑衣」に、老萊子が歳七十にして、父母の前で模様のある派手な服を着て、赤ん坊のまねをし、孝養を尽くした話がある。

(訳)飄々とした神女の織り機で、峰に懸かる雲をちぎって、仙人の服を裁つと、霞の模様に波文を帯びています。春の洞で広げれば、石の床にも寒さを感じません。どうして予想し得ましょう。天上の物が、私のような野人の身に落ちてくることを。再拝して感極まり、(感激の涙が)別れの涙とともに流れます。帰って斑衣にあてれば、父母の膝元で故郷に錦を飾ることができます(＊孝養も尽くせるし、故郷に錦を飾ることにもなり、一挙両得であることを言うか)。

＊履軒の父中井甃庵は一七五八年に既に亡くなっている。この場合、膝下というのは母であろう。

＊佐野大介「中井履軒の「孝」観」(『懐徳堂文庫の研究　共同研究報告書』湯浅邦弘編、二〇〇三)から推察すると、履軒は「老萊斑衣」のような話は好きでないし、信じないタイプのはず。

三〇、南帰途中口号(二首)

＊口号は口を衝いて出る即興の作。

長鋏已弾尽　長鋏　已に弾じ尽くし
扁舟今帰来　扁舟　今　帰り来たる
一揖京洛塵　一たび京洛の塵を揖えば
未化旧素衣　未だ旧の素衣を化せず

(注)＊長鋏已弾尽……「丁亥仲冬辞京南帰、席上賦上菅公」注参照。＊未化旧素衣……晋陸機「為顧彦先贈婦」(『文選』巻二四)に「京洛風塵多、素衣化為緇」とある。また、『論語』「陽貨篇」に「不曰白乎、涅而不緇(孔子が自分が世の中の悪い風潮に染められないことを言った言葉)」とある。

(訳)すでに長剣を鳴らし尽くし、今私は扁舟に乗って帰り来る。一度京都の塵を払うと、白い衣は元のままだ。

其二

周歳京洛遊　周歳　京洛に遊び
胸襟飽烟霞　胸襟　烟霞に飽く

帰装何長物　帰装 何ぞ長物
惟有奚囊富　惟だ奚囊の富める有るのみ

（訳）京都で一年を過ごし、胸の内は京都の景色でいっぱいだ。帰りの荷物はなんと無駄なものだろう、ただ詩が増えただけだ。

＊その増えた詩の内容が「寂しさ」であることからすると、私の京都行は「虚しい思い」を味わっただけだと表明していることになる。

（参考）履軒の手録『履軒小乗』中に京都行の携帯品目があるが、その末尾にこの詩が置かれている。『履軒小乗』には、おびただしい物品と書物名が記されており、西村、山中浩之ともに一時の仮寓の装いではなかったと言う（『懐徳堂考』および『中井竹山・中井履軒』）。竹山「孤雁歌、送処叔弟之京」（孤雁の歌。処叔弟の京に之くを送る）（『奠陰集（詩集）』巻二）もこの京都行を履軒の独立と考えているようだ。『懐徳堂会餞詩巻』でも、参加者は京都行を履軒の出世ととらえている。『洛汭奚嚢』に見える早野仰斎らの便りも出世を祝う内容が多かったと推測できる（「答早士誉」三首）。そうであれば、なおさら履軒の挫折感は強まったであろう。

（跋）

丙戌之冬、余北游于京、客於吏部菅公門下。公神明之裔也。好学愛士、能忘其貴而為布衣之交。期年余辞而南還、則廬于長渠之上。拮据既竣、探嚢得詩数十篇、皆京中之稿及往還途上之作。稍々披読之、戚焉有感于懐、弗忍毀也。取而次第之、命曰洛汭奚嚢、以供異日之観云。嗟夫、余自京師至未数月也。然其動感既如斯、則異日髪種々而回顧少壮之遊于数十年之前、恐有不耐読者。

明和四年季冬朔　履軒幽人書　印（「積」「徳」）

丙戌の冬、余北のかた京に游び、吏部菅公の門下に客たり。公神明の裔なり。学を好み士を愛し、能く其の貴きを忘れて布衣の交りを為す。期年にして余辞して南還し、則ち長渠の上に廬す。拮据既に竣わり、嚢を探れば詩数十篇を得。皆京中の稿及び往還途上の作なり。稍々之を披読すれば、戚焉として懐に感有り、毀つに忍びざるなり。取りて之を次第し、命じて洛汭奚嚢と曰い、以て異日の観に供せんとしか云う。嗟夫、余京師より至りていまだ数月ならざるなり。然れども其の動感既に斯くの如くんば、則ち異日髪種々として少壮の数十年の前に遊ぶを回顧せば、恐らくは読むに耐えざる者有らん。

（注）＊吏部……式部の唐名。高辻卿は一七六五年に式部大輔になっている（『公卿人名大事典』日外アソシエーツ、一九九四）。＊長渠……長堀のこと。履軒は帰阪後、懐徳堂へは戻らず、長堀に居を構えた。＊拮据……滞ること。＊種々……髪が薄くなった様。

（訳）丙戌（一七六六）の冬、私は北の京都に遊学し、式部高辻卿の門下に客となった。卿は由緒正しき家柄で、学を好み士を愛し、身分の違いを忘れて私と付き合ってくださった。一年で私は辞して南に帰り、長堀の畔に庵を結んだ。ようやく落ち着き、詩の袋を探ってみると詩が数十篇見つかった。すべて、京都での作もしくは往還途上での作である。いささか目を通してみると、しんみりと心に感じるものがあり、捨てるには忍びない。そこでそれらを整理し、『洛汭奚嚢』と名付け、将来の思い出として残すことにした。ああ、私は京都から帰ってまだ数ヶ月に過ぎな

いのにこのように感じるところがあるということは、将来髪が薄くなって数十年の前の少壮の遊学を回顧すれば、恐らくは読むに耐えないものがあるだろう。

おわりに

『洛汭奚囊』が表現しているのは京都での寂しさである。寂しさというのは、故郷への思いが一番大きいようだが、冷遇を示唆する表現もある(「聞槐庵兄落新居」「答早士誉」)。また、履軒は忌憚なく学問の話をすることを望んでいたが、それもままならなかったことが推測できる(「偶成」「宿居易館」「奉酬伯兄及諸友見懐諸作」「碧山楼陪菅公、賦奉酬」)。『洛汭奚囊』を見る限り、履軒にとって京都での生活は決して楽しいものではなかったようだ。歓びを感じさせるものは、旧友の訪問、手紙、大阪の自由な生活の想い出だけだったらしい(「永輔義佐寄酒鶏子来題簡背附之」「偶成」「憶旧遊寄早士誉」「答早士誉」「懐魚膾戯賦」「月下独酌懐川上習之此寄」)。そして、結局は高辻卿に重用されることなく、大阪に帰ることになった。あの大阪に帰れるという喜びもあるが、やはり無念と挫折感とは免れない(「丁亥仲冬辞京南帰、席上賦上菅公」「南帰途中口号」)。だが、この経験が私の生き方を再認識させてくれた。私はもう決して宮仕えしようなどとは思わない。……履軒の気持ちはこのようであったのではなかろうか。

履軒は、京都行以前にすでに隠逸的傾向と高みから物事を眺める視点とを有していた(「はじめに」注三参照)。そして、その傾向、視点は京都にいる時に一層はっきりとした(隠逸傾向:「述客中況、答早士誉」「宿居易館」、高み:「羈鳥辞」「九歎」)。履軒にとって京都行は自らの生き方を再認識する経験であったと言えるかもしれない。履軒はその後、幽人として自らの精神的王国華胥国に遊ぶが、その人生を決定づけたのがこの京都での一年だったと言えるのではなかろうか。孔子が諸国遍歴の挫折を経た後に学問に専念し歴史に名を残し、子思孟子が発憤著書した(「歎毀」)ように、履軒はこの経験により、迷いなく学問に全精力を傾け得たのかもしれない。それが履軒にとって幸せだったかどうかは知らないが。

＊履軒が一年で帰阪したことについて、西村時彦は、履軒が京都で皇室の衰微と公家の無気力とを見、幕府の盛んな中、王道の行うことのできないのを悲しみ、仕官の念を断ったと推測する(『懐徳堂考』下六三頁)。だが、『洛汭奚囊』にはその推測の裏付けは見つからない。西村は、明治の時代思潮(あるいは自らの思想)を反映して、竹山・履軒を尊皇の志士に祭り上げようとする傾向があるので注意が必要である。

一方、帰阪後の私塾水哉館設立について、山中浩之は、京都での生活で自信を得て独立を決意したものとする(『中井竹山・中井履軒』一九六頁)。だが、京都行自体すでに自他ともに独立と認識したと考えられる(竹山:「孤雁歌、送処叔弟之京」『奠陰集(詩集)』巻二、拙稿「『懐徳堂会餞詩巻』訳注―中井履軒京都行の送別詩」附録を参照。履軒:「既上舟、奉寄伯兄(其二)」また、自信を得たというのも『洛汭奚囊』の内容からは的を射たものとは言い難い。

帰阪後の履軒についても、本稿同様に、履軒の詩文から探ることができる。それについては、稿を改めたい。

〈附録〉

「はじめに」で述べたように、履軒の漢詩集『履軒古風』の巻二は『洛汭奚囊』と重なるが、作品に出入がある。以下、その異同を記し、履軒の心情をよく表している作品として「離恨」を載せる。

・『履軒古風』にあって『洛汭奚囊』にないもの……「離恨」「読王祥伝」。

・『洛汭奚囊』にあって『履軒古風』にないもの……「離席、奉答伯兄」「既上舟、奉寄伯兄(三首)」「雪朝奉呈菅公」「丁亥早春自帰省浪華至、題所携梅花、上菅公」「碧山楼陪菅公賦奉酬」「遊高台寺」「答士誉　其二、其三」「九月十三夜」「南帰途中口号　其二」。

離恨

瞻彼北山　彼の北山を瞻(みる)
発我南音　我が南音を発す。
清商入徵　清商　徵(ち)に入り
凄惋動人　凄惋　人を動かす。
有客問我　客有り我に問う
何為乎然　何為(なんす)れぞ然るや、と。
人鮮兄弟　人　兄弟鮮(すく)なく
他郷離散　他郷に離散す。
素秋将央　素秋　将に央(つ)きんとし
草木且変　草木　且(まさ)に変ぜんとす。
霧露侵体　霧露　体を侵し
思夢煩襟　思夢　襟(むね)を煩す。
匪飢匪渇　飢えず渇せざるも
伏枕輾転　枕に伏して輾転す。
何日斂翼　何れの日か翼を斂(おさ)むること
于彼旧林　彼の旧林においてせん。

(注)＊南音……南の音楽。＊清商入徵……商徵ともに古代中国の音階。＊匪飢匪渇……『詩経』「小雅」「甫田之什」「車舝(しゃかつ)」に見える。

(訳)あの北山を見て、我が南の音楽を奏でる。
調べは短調へと変わり、その凄まじさは人を動かす。
ある人が私に尋ねた。「どうしてこのようなのですか」と。
(私は答える)「兄弟が少ない上に、他郷に離散しているのです」と。
秋はまさに尽きようとし、草木はまさに色褪せようとしている。
露が体を侵し、悩ましき夢が心を苦しめる。
飢えも渇しもしていないが、枕に伏せて寝返りを繰り返す。
いつになったら、あの故郷の林で翼を休めることができるのだろう。

(大阪府立工業高等専門学校助教授)